

『武士道は即ち実業道なり』～渋沢武士道への結論

「渋沢栄一は偉大なるコピーライターである」という説

「論語と算盤」、「士魂商才」、「武士道とは実業道」など、数々の「名コピー」を創り出した渋沢栄一にはコピーライターとしての資質があった（に違いない）と唱える人がいる。

コピーライターは、言葉を通じて「価値を伝える」「心を動かす」「ブランドを育てる」職業と解されている。コピーライターの多くは、「言葉の力を信じ、社会にポジティブな影響を与えること」を信条にしている。

（コピーライティングにおける二次元思考）

一次的思考（表面的な理解）を超えて、本質的な価値や感情、背景に目を向ける思考法で、ターゲットの深層心理に届くコピーを生むことができるとされている。

論語とソロバンというかけ離れたものを一致させることが、今日の急務だと自分は考えているのである。『論語と算盤』第1章 処世と信条

自分個人の立身出世よりも、国の人々の・国家のことが優先しているという、「生き様」「行動を伴った人生哲学」が生涯を通じて渋沢栄一にはあったと筆者は解釈しています。この根本の哲学・行動規範に「武士道精神」があったと解しています。（濱名さん報告書「渋沢栄一と武士道精神」）

渋沢にとって「武士道」は「実業道」を引き立てる脇役にすぎない

わたしがとても残念に思うことがある。それは武士道が日本の代表的な長所だったにもかかわらず、古来もっぱら武家社会だけで行われ、経済活動に従事する商工業者の間では、重んじられなかったことである。『論語と算盤』第8章 実業と士道

渋沢にとって、武士道はあくまで武士道であるにすぎず、決して実業道にとって代わるものではない。経済活動に従事する者に対して「武士道の精神を見習え」と説いているのである。多くの人々が支持する日本古来のスピリチュアルな考え方を、商工業者に対して教宣・浸透させ「実業道」なるものを確立したかったのだろう。

広く読まれ支持されている「論語」を通じて、金勘定の道理を説いているのも同様だ。ベストセラーの人気にあやかって、自論を弘報しようとしているように見受けられる。（得丸見解）

最近発見された渋沢の文章に、「論語」について次のような記述がある。

孔子の教訓は、学問というよりもむしろ処世の指針である。すなわち実際に活用すべき活きた教訓なのである。それゆえに一字一句に拘泥するべきものではなく、その精神を採用して処世の教訓とすべきものなのである。私はこの意味において論語を座右の銘とし、論語の精神に則って世を渡ってきたのである。

そして、このようにも語っている。

学者の中には、論語の字句を引用して、その誤りを指摘する人もいるけれども、それは論語の根本精神がどこにあるかを明らかにしないためである。言い換えれば学問に偏って枝葉の問題に拘泥し、肝心の根本精神をなおざりにしている結果である。

これらの文書は、渋沢が第一線を退き、慈善事業に専念していた78歳から91歳で亡くなる直前に書かれたもので、そこには、もはや「論語と算盤」や「武士道、実業道」などは一切登場してこない。

渋沢の潔さがよく表われているのではないか。「日本資本主義の父」としての役割を充分に果たし切った満足感なのだろうか。(得丸見解)

[参考] 渋沢栄一随筆テーマ(抜粋)

- 人は磁石の如くなれ (大正七年 七八歳)
- 仕事に魂を入れよ (大正十年 八一歳)
- 知行合一 (大正十四年 八五歳)
- 克己鍛錬法 (昭和二年 八七歳)
- 人それぞれ基本分を尽くせ (昭和三年 八八歳)
- 所世の信条 (昭和四年 八九歳)
- 処世の日常の心得 (昭和五年 九〇歳)
- 義務を尽くして権利を得よ (昭和六年 九一歳)
- 新孝道論と父晩香の追憶 (昭和六年十一月永眠)

以上